

令和2年度 さいたま市立仲本小学校 自己評価書

校長 宇佐見 弘幸



1 学校で設定した「令和2年度の目標」及び関係する「評価項目」について

- (1) 確かな学力の育成（3つのG<Grit, Global, Growth>の視点からの授業改善・ICTを積極活用した授業づくり）
→教育課程の編成・実施状況、各教科等の授業の状況、児童生徒の状況
- (2) コミュニケーション力の向上（心のサポート、いじめ撲滅体制の確立）
→いじめ防止等の状況、生徒指導の状況、教育相談の状況
- (3) 安全で落ち着いた教育環境の整備（危機管理体制の構築と意識の徹底、安全な登下校指導と生活指導の徹底）
→安全管理の状況、安全教育の状況
- (4) スクール・コミュニティによる連携・協働（教育内容の積極的公開・情報発信、学校評価の充実、地域社会の教育力の活用）
→学校に関する情報公開の状況、学校と保護者、地域住民との連携の状況

2 評価結果について

【成果】

- (1) 保護者等アンケートより、「一人ひとりの子どもたちを大切に育てる教育の推進」「学習指導・評価」について、肯定的な回答が9割を超えている。よい授業の4つの因子を意識した授業の実施、学校課題研修や学年会等での教材研究等の成果と考える。
- (2) 「いじめへの対応」については、保護者等アンケートより肯定的な回答が9割近い。学級や学年だけでなく生徒指導委員会、教育相談部会等学校全体で情報を共有するとともに、関係諸機関(教育相談室、児童相談所、SC、SSW等)を活用し、迅速な対応を心掛けている成果と考える。
- (3) 保護者等アンケートより安全指導について肯定的な回答が9割以上を超えている。安全点検や安全指導についての成果が出ていると考えられる。
- (4) 保護者等アンケートより「教育活動の公開」「家庭への連絡」について肯定的な回答が9割近い。新型コロナウイルス感染症による新しい生活様式の中、学校からの文書・HPや学校公開や各種会議等を通して、適切に情報公開・連絡が出来ていると考えている。

【課題】

- (1) 「あいさつ」について、職員の自己評価や保護者アンケートより肯定的な回答が6割にとどまっている。児童の自己評価は高いため、相手に伝わる気持ちのよいあいさつや地域におけるあいさつについての意識が低いことが考えられる。
- (2) 児童アンケートから「わからないときは、先生に質問をしますか」について、肯定的な回答が8割に届かず、改善が必要と考える。

3 次年度に向けた具体的な改善策について

- 「あいさつ」について、児童同士や教職員だけではなく、地域で見守って下さる方、校内ですれ違う大人にも挨拶や会釈をすることを児童に積極的に指導・評価していく。また、様々な形のあいさつ運動や回数を増やして児童の意識を継続して高めていく。
- 「先生に質問する」について、校内研究や研修において、児童理解と温かで適切な信頼関係を醸成する環境づくりと、児童の自立に向けた教育活動の推進を行っていく。また、児童の教育相談週間を設けて、児童との対話の機会を増やしていく。

令和2年度 さいたま市立仲本小学校 学校関係者評価書

さいたま市立仲本小学校

学校関係者評価委員長 芹澤 妙子 印

1 学校関係者評価の実施体制

(1) 構成人数

7人

(2) 実施回数

3回

2 学校関係者評価（学校関係者評価委員の意見等）

仲本小について、あまり大きな問題はないと認識している。

・あいさつについて

誰にでもするという時代ではない中、本校の児童はあいさつができる方だと感じる。しかし、朝の登校

時や大勢でいるときはあいさつをしないこともある。

今後のことを考えると、いつでもあいさつをするという意識があればよいのではないか。また、大人がいつも見守っているというメッセージを込めて声をかけていくことも大切である。

・感染症拡大防止について（新しい生活様式）

マスクの着用やソーシャルディスタンス、会話を控え、大声を出さない生活の影響が心配。ぜひ GIGA スクールタブレットを活用した話合いや先生に声が届く工夫をしてほしい。

また、普段積極的に発表をしない児童や目立たない児童に対して、先生とつながる手段（ツール）になることを期待している。

学校関係者評価を受けた学校の対応

・あいさつについて

あいさつをする様々な立場、形、回数を経験を意図的に増やして、あいさつすることが社会の中で大切であるという意識を育成していく。

・タブレット活用について

職員研修の実施や学校課題研修の中で研究をすることで、教職員のスキル向上、教材や指導方法の開発を進めていく。さいたま市立仲本小学校長 宇佐見 弘幸 印